

## ■ 編集後記

ニュートンはリンゴが木から落ちるのを見て万有引力の法則を発見し、ガリレオは木星に衛星が4つあるのを観測して（実際はもっとあるが当時の技術では4つしか見えなかったらしい）地動説を唱えたとも言われている。観察された事実から根底に潜むものごとの本質を見抜くのは、優れた科学者に要求される能力の1つである。同様に、症状や検査結果からその患者の病態の本質を見抜くのは優れた臨床医に要求される能力の1つでもある。

近年の画像診断の進歩は急速で、1つの画像検査を行っただけで従来では考えられなかったほど多くの結果・情報が得られるようになった。One-stop shopping という検査用語をよく耳にするが、このことは心臓の画像診断にもよく当てはまる。加えて、最近ではマルチモダリティイメージングという言葉もしばしば聞くが、これも心臓の画像診断には特によく当てはまる。個々の検査から得られる情報が多く、モダリティの数が多いのであるから、得られる情報の数はかけ算となって必然的に多くなる。多くの情報から重要なものを選択し、それらを基に患者にとって利益のある治療方針を適切に選択していくセンスが臨床医には求められている。目の前にある多くの情報から病態の本質を見抜く－そうであれば情報自体も本質にせまったものであってほしいという思いがある。

核医学検査は生体内の物質の動きや量を画像化する機能イメージングである。生体活動の基本的な部分を描出しているモダリティであるとも言える。CTやMRIとは異なり、オートプシーイメージングという使用法は核医学検査ではあり得ない。生きていることの本質にせまっている手法なのではないかと考えている。この生体活動との短い距離感という核医学検査の優れた特徴をどのように引き出せば病態の本質にせまることができるのか。核医学に従事するものにとって難しい問題ではあるが、チャレンジングな課題でもある。

橋本 順  
東海大学

### 「心臓核医学」誌への一般投稿の受け付け開始

「心臓核医学 (Nuclear Cardiology: Official Journal of JSNC)」誌に一般投稿の受付を開始します。従来、本学会学術大会でのシンポジウムや講演、関連学会としての日本核医学会、日本循環器学会、日本心臓病学会で施行されたジョイントシンポジウムから特集を組み、その他の依頼記事と合わせて、心臓核医学に関連する総説や学会からの報告を中心に構成されてきました。本誌をさらに活発な情報提供の場とすることを目指して、一般投稿の受付を開始します。国内でも多くの心臓核医学に関する臨床研究や技術的研究がなされています。また、まれな症例だけでなく、教育的価値のある症例も経験されます。このような研究を公開する場として、和文、英文を問わず、本誌への投稿をご検討頂きますようお願いいたします。掲載論文は本誌での出版と同時に、一般にウェブでアクセス可能なPDF形式でも公開されます。当面は、投稿規定（52ページ）にあるとおり編集委員会宛に原稿を電子メールでお送りいただく形でスタートしますが、さらに発展させて本学会の機関誌としての情報交流の場となることを願っています。

(編集委員長・中嶋憲一)